

雑種豚による生産哺育技術に関する試験

東 正利・横山純夫

(鹿児島県養豚試験場)

HIGASHI, M., and YOKOYAMA, S.

Experiment of produce and nurture art using mongrel breed swine

鹿児島県で飼養されているパークシャー (B) ならびにランドレース (L) のF₁を母体として、肉用素豚を生産する場合のF₁母豚の生産哺育能力、三元雑種子豚の発育等を知り、生産哺育技術の確立を図る目的でBおよびLを対照として繁殖育成成績、泌乳能力、母豚体重の推移等につき、昭和42年秋期から43年秋期まで2次にわたり、調査試験を行ない、2次とも、ほぼ同様な結果を得たので総括して報告する。

I. 試験材料ならびに方法

供試豚は第1次が各区4腹、第2次はF₁、B区各4腹、L区7腹の計35腹を供し、交配雄はF₁区 (B・LとL・B) にHとWを用いた、なお供試飼料は母豚子豚とも市販配合飼料を用い、母豚は粉餌に打ち水して制限給与し、子豚には粉餌を不断給与した。また離乳は5週齢で一斉に行なった。泌乳量の測定は「豚に関する試験研究打合せ会議申合せ事項」による週毎に日中8時間測定する簡易法で実施した。

II. 試験成績および考察

(1) 1腹産子数はF₁にWとHを交配した区が11.5頭、L区10.9頭、B区9.9頭でF₁母豚の産子数が最も多かった。

(2) 哺育率は5週時でF₁区94.3%、B区92.7%、L区86.0%で9週齢時も1、2次ともにF₁区が良く、Lはやや劣った。これは子豚の虚弱死が影響したためと考えられる。

(3) 発育成績はF₁区が、1、2次ともにすぐれていた。

第1表 子豚の発育成績と1腹平均総体重 (kg)

区分	発育	1週時		3週時		5週時		9週時		9週迄の増体	
		体重	増体	体重	増体	体重	増体	体重	増体	増体	増体率
B・L	1腹	12.92 ± 3.2	47.65 ± 11.5	79.17 ± 20.3	66.25	76.57 ± 19.8	163.59 ± 47.1				
	(1頭平均)	(1.313)	(5.610)	(9.385)	(8.072)	(20.839)	(19.526)				
L・B	1腹	14.79 ± 0.9	53.53 ± 5.4	93.13 ± 8.4	78.34	201.55 ± 30.6	187.48 ± 30.5				
	(1頭平均)	(1.285)	(5.355)	(9.333)	(8.048)	(20.126)	(18.860)				
B	1腹	19.72 ± 2.6	31.12 ± 5.3	76.90 ± 11.9	57.18	144.55 ± 22.7	128.83 ± 21.9				
	(1頭平均)	(1.272)	(4.911)	(8.124)	(6.852)	(17.275)	(15.999)				
L	1腹	12.51 ± 2.8	39.16 ± 10.7	68.70 ± 17.9	56.19	145.79 ± 33.7	132.27 ± 30.9				
	(1頭平均)	(1.276)	(5.239)	(9.271)	(7.995)	(19.777)	(18.501)				

(4) 1腹における母豚の泌乳日量はF₁区は概して

偏差が小さく子豚の吸乳日量も多い傾向が認められた (表2)。

第2表 1腹の泌乳日量と子豚吸乳日量の推移

区分	1腹の泌乳日量 (kg)					1週~5週の総量	1腹平均日量	子豚1頭総量	1日平均吸乳日量
	1週	2週	3週	4週	5週				
B・L	5.97	7.39	8.05	7.31	5.82	241.64kg	6.90kg	28.76kg	0.814kg
	±1.86	±1.49	±0.90	±0.89	±2.75	±34.90			
L・B	6.30	7.53	7.84	6.78	5.00	234.02	6.69	23.50	0.666
	±1.05	±1.19	±0.64	±0.98	±1.25	±23.20			
B	4.73	6.60	6.03	5.92	5.09	196.18	5.63	23.43	0.670
	±0.98	±1.82	±1.90	±1.30	±1.49	±34.80			
L	4.47	5.69	6.59	6.26	5.07	196.46	5.61	24.99	0.714
	±1.36	±1.64	±1.97	±1.93	±1.76	±55.90			

(5) 子豚の飼料消費量は三元雑種がやや多くを要し母豚の場合は妊娠、哺育の各期を通じF₁はLに対し56%少なくBにくらべ1次は19%、2次では14.4%多く要した。

(6) 母豚の妊期における増体はF₁がLに対し12%、Bに比べ3%多く、哺乳期の体重減少はF₁がLに対して6%多く、Bとは大差のない傾向にあった。

第3表 母豚の妊娠、哺育期の体重増減の推移 (kg)

区分	産次	交配時	分娩時	分娩後	1週					同	減少
					1週	2週	3週	4週	5週		
B・L	4.1	171.0	249.4	221.8	209.0	193.1	196.8	187.6	177.3	-kg	%
		+0	+78.4	45.7	-0	-12.8	-9.9	-2.3	-10.9	45.1	20.3
L・B	4.5	178.5	239.4	216.7	204.0	198.5	189.0	186.5	169.7	-	-
		+0	+60.9	34.2	-0	-12.7	-5.5	-2.5	-15.0	47.12	21.7
B	4.2	170.3	253.3	214.5	203.9	198.8	192.7	185.9	172.8	-	-
		+0	+83.0	38.2	-0	-10.6	-5.1	6.1	-6.8	12.5	47.2
L	4.0	192.2	247.9	227.9	216.7	214.8	211.6	205.7	193.8	-	-
		+0	+55.7	29.0	-0	-11.2	-1.9	3.2	-5.9	-12.1	34.1

以上、雑種豚による生産哺育技術に関する基礎資料を得るための一連の調査成績をLとBについて要約したが、供試豚の月齢産次、子豚頭数、栄養状態等が区々であったため結論を得るには若干の問題もあるが一応本成績からすればF₁(L・BおよびB・L)の母豚の産子数、育成率、子豚の発育ともに良い成績を示し、母豚としての強健性をも備えていた。またこれらの育成繁殖にあたっては育成中の飼料消費量および妊娠期の体重の増、哺育期間中の体重減少などを考慮し飼料給与量はL給与量より5~11%落しの範囲内、Bより20%前後多い目の量が一応の日安と考えられる。今後はF₁母豚の能力について調査例数を重ねるとともに三元雑種の産肉性についても検討の必要があると考えられる。